

## 第四講 現代と歴史学

【本日の課題】 史料は自ら歴史を語るのか？

レポート課題の解説：近代歴史学

主観・脚色の排除と歴史叙述の客観化

批判・・・・・・主観を排除し切れるか？

国民という枠組みの使用。

歴史学の大原則：歴史学は事実を基礎とする。

しかし、歴史家による解釈という過程を経て構築される。

最近の英国人ジャーナリストの投稿記事

トマス=クーン（中山茂 訳）『科学革命の構造』みすず書房、1971年。

科学史家

パラダイムの転換

現在の問題：事実の客観性への疑い

過去と現在との対話（エドワード・H・カー：1892－1982）

ロシア革命の研究者

原田三郎・宇高基輔訳『ボリシェヴィキ革命——ソヴェト・ロシア史 1917-1923』

（全3巻）みすず書房、1967年。

清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書、1962年。

歴史を客観的事実のみでは叙述できない。

認識→評価→選択→解釈→説明が求められる。

新聞・日記・備忘録・手紙・公文書などのテキストの存在。

過去はそのままでは歴史とはならない。

18世紀ロンドンでの交通事故は歴史的イベントとなるのか？

ロバート・ダーントン（海保真夫・鷺見洋一訳）『猫の大虐殺』岩波現代文庫、1990年：1780年代の

パリ、印刷工たちのスト→パリ市内の騒乱に発展→治安部隊の動員

これは歴史的イベントとなるのか？

革命前の社会的不安の横溢を示す→歴史的イベントとなる

セレスタン・ギタール（河盛好蔵訳）『フランス革命下の一市民の日記』中央公論社、1980年

農村に食物を買い出し→ダルトン極小期→凶作と食糧不足→アーサー・ヤングの記述と一致

現代という視点の重要性。

「過去と現代との対話」として歴史学の方法を規定。

現代の恣意性を排除。

### 参考文献

エドワード・H・カー（清水幾太郎 訳）『歴史とは何か』岩波新書、1962年。

セレスタン・ギタール（河盛好蔵 訳）『フランス革命下の一市民の日記』中央公論社、1980年。

トマス=クーン（中山茂 訳）『科学革命の構造』みすず書房、1971年。

ロバート・ダーントン（海保真夫・鷺見洋一 訳）『猫の大虐殺』岩波現代文庫、1990年。